

財団設立と美術品コレクションの公開

プロジェクト代表者：鈴木邦夫（経済学部・教授）

1. 本研究の課題

研究は、国立公文書館に所蔵されている持株会社整理委員会（財閥の解体作業を担当）の資料を分析することにより、財閥家族が所有していた美術品（税法上の名称は「書画骨董」）がどのくらい処分され、あるいはどの程度処分されずに残って財団に寄贈されたのかを明らかにすることである。

2. 財閥解体と財閥家族の資産処分

1947年3月13日に、日本政府は56人を財閥家族に指定した（のち、1人追加）。1947年9月18日にGHQ（連合国軍総司令部）の反トラスト課長が日本政府に対して覚書を発し、「指定者は其の生活上必要な財産の最小限度を申告し、残余に財産を処分する」よう命じた。この覚書を受け、持株会社整理委員会は指定者（指定財閥家族）に対して不動産と動産の処分を要請した。指定財閥家族は、指定が解除される4ヶ月前の1951年3月末までに不動産の44.2%（財産税課税価額をベースに計算）、動産の19.8%を処分した。動産の大半は書画骨董である。不動産の場合には、敗戦以降、時価が急速に上昇していったため、相対的に売却を進めやすかった。ところが、書画骨董の場合には、敗戦後、価格が暴落したため、売却には不利な状況が続いたのが影響して、不動産よりも低い比率となっている。ただし、書画骨董のうち金製品は、金価格が高騰したために、例外的に極めて高値で処分されている。

3. 書画骨董の処分

書画骨董が大半を占めていた動産処分の比率を家別に見ると、かなりのバラツキがある。平均より高いのは三井家42.8%、大倉家39.8%、安田家26.0%、中島家20.4%である。これに対して、岩崎家は10.6%、住友家9.6%、野村家0%である。ただし、処分金額（財産税課税ベース）で見ると、第1位三井家395万円、第2位住友家108万円、第3位大倉家105万円である。住友家は所有する動産の評価額が第1位であるために、処分の比率は低いものの、処分の絶対額は比率第2位の大倉家を上回っている。

資料を分析することにより、つぎのような予想外の事実が判明した。

第1に、三井の総領家（北家）＝三井八郎右衛門家が「売り食い」をやっていたことである。売り食いとは、美術品をつぎつぎに売って生活費を賄うことである。北家はのちに（財）三井文庫に優れた美術品を大量に寄贈したため、寄贈のときに同財団に勤務していた筆者ら職員は売り食いをしなかった家の一つと誤認していた。

第2に、三井の本家の一つである三井高大家（室町家）についても売り食いをしなかった家であるという筆者ら職員の推測は誤りであった。同家は東京帝室博物館に預けていたと推定される国宝1点を除き、ほとんどすべてを売却した。ついで財閥家族指定解除後に、室町家は美術品の購入を再開したのである。新に購入したもののなかに、室町家先々代が購入した茶碗（現在、国宝）や故・三井高泰（永坂町家）の旧蔵品が含まれている。これ

らが三井文庫に寄贈されたため、所蔵の経緯を誤認していたのである。

第 3 に大倉家も財産税の支払と家計費の捻出のため、国宝指定物件などを次々と売却している。戦後に大倉喜七郎から財団法人大倉文化財団が近代絵画の寄贈をうけたと財団がホームページに記載しているため、大倉喜七郎所蔵の美術品のかなりの部分が寄贈されたと推測していた。ところが実際には大倉喜七郎がめぼしい美術品を売却していたのである。

第 4 に住友吉左右衛門家も売り食いをおこなっていた。泉屋博古館学芸員の話では、青銅器コレクションを守るため、昭和 30 年代に入っても他の美術品をかなり売却したという。

第 5 に岩崎小弥太家の場合には、1945 年 12 月に小弥太家が死亡したため、美術品のうち優品 171 点（うち国宝 5、需要美術品 102）が財団法人静嘉堂に寄贈され、残る美術品 5611 点が妻の孝子に相続された。孝子は売り食いをせず、死後、1975 年にすべて静嘉堂に寄贈されたようである。なお、三菱の創業者岩崎弥太郎の子孫である久弥家の美術品は、ほとんどが偽物か価値のないものであった。

第 6 に野村財閥に創業者野村徳七の子孫である野村文秀家の場合には、財産税課税時点で純資産がマイナスであったため、財産税支払はゼロであり、他の財閥家族のように高額 of 財産税に喘ぐことはなかった。その後、未払いの相続税が大幅に減額されたため、資産内容が好転した。そのため、美術品を売り食いせずにすんだのである。

4. 財団設立と美術品の寄贈

このような経緯をたどって各家の美術品が 5 つに財団の寄贈されることになる。寄贈の年や寄贈点数は以下の表のとおりである。なお、静嘉堂、大倉集古館は敗戦前に設立された財団である。1960 年に住友吉左右衛門家の美術品を受け入れて泉屋博古館が設立され、1985 年に野村文秀家から美術品の寄贈を受ける形で野村文華財団が設立され、1965 年設立の歴史資料保存・研究機関の三井文庫が 1984 年から三井八郎右衛門家などの美術品の寄贈を受け、それぞれ公開を始めたのである。これら 5 つの美術館は東洋美術の優品を展示する日本有数の美術館となった。ただし、大倉集古館は戦前からすでにこれに該当している。

美術館名	三井記念美術館	静嘉堂文庫美術館	泉屋博古館	大倉集古館	野村美術館
現財団名	公益財団法人三井文庫	公益財団法人静嘉堂	公益財団法人泉屋博古館	公益財団法人大倉文化財団	公益財団法人野村文華財団
設立年月日	2010年4月1日	2009年12月1日設立	2010年6月1日		
旧財団名	財団法人三井文庫	財団法人静嘉堂	財団法人泉屋博古館	財団法人大倉文化財団 財団法人大倉集古館	財団法人野村文華財団
旧財団設立年月日	1965年5月21日	1940年	1960年	1917年	1983年
美術工芸品所蔵点数	合計約4,000点	合計 6,532件	合計 2,974件	合計約2,500件	合計 1,278点
	(2012年5月時点)	(公益財団設立時点)	(公益財団設立時点)	(公益財団設立時点)	(公益財団設立時点)
	(1985年三井文庫「別館」=美術館設立)	(1977年から静嘉堂文庫展示館で美術品の一般公開、新館を建設して1992年に静嘉堂文庫美術館を開館)	(1970年青銅器・鏡鑑の展示室完成)		(1984年開館)
指定物件	国宝6点、重要文化財71点	国宝7点、重要文化財83点	国宝2点、重要文化財13点	国宝3点、重要文化財13点	重要文化財7点
財団解体後の美術品寄贈者	1984年 三井八郎衛門(北家)・三井高遂(新町家)1040点、1992年故・三井高大(室町家)約300点、その他の寄贈を含め、2000年までに北家1900点、新町家1050点、室町家710点	1946年故・岩崎小弥太171点、1975年故・岩崎孝子約5000点	1960年住友吉左衛門、1981年頃住友吉左衛門(故・寛一分を買い取って寄贈)	大倉喜七郎が日本近代絵画を寄贈か	1983年野村文秀